

日本の骨董～外国人を魅了するアンティークとは少し違う古いもの

動画リンク: <https://youtu.be/YsBxubzvwXw>

今回は、日本の骨董を学びながら日本語を勉強しましょう。

また、この動画は、前半は少しゆっくりのスピードで、漢字には「ふりがな」があります。後半は少しだけ速く(+20%)なり、漢字に「ふりがな」はありません。学習にお役立てください。

■はじめに

大人になるとなぜかアンティーク(antique)に興味を持つようになります。

日本でも一部の大人は骨董を買うようになります。アンティークを骨董と訳しますが、両者は別物と考えてよいでしょう。

外国人を魅了するのは日本文化が色濃く反映された骨董です。外国の人に人気の骨董は、浮世絵、陶器と磁器、刀や鎧や兜などの武具です。

茶道具や仏具も注目されています。日本人の骨董の楽しみ方を解説したうえで、外国人が日本の骨董をどのように楽しんでいるのか紹介します。

■骨董とは何か

骨董のことを骨董品と呼ぶこともありますが、骨董に「品物」という意味も含まれているので、ここでは骨董と呼びます。

骨董とは古くて価値があるものです。古くて汚くて要らないものは骨董ではなく、価値が高くて新しいものは骨董ではありません。

ではどれくらい古いと骨董と呼べるのか。「いつ」とは決まっていますが、数百年前～千年前ぐらいのものを骨董と呼ぶことが多いです。

したがって、数年前や数十年前のものはまだ骨董と呼びづらいかもしれません。そして何千年も前のものだと古すぎるでしょう。

では骨董の価値とはなんでしょうか。美術館に並ぶほど価値が高くなると、それはもう骨董というより美術品になってしまいます。

骨董の価値は「美術品に近い相当価値が高いもの」から「少数の人だけが価値を認めるもの」まで幅広い特徴があります。

比喩として使われる「骨董」という日本語にはネガティブ(negative)な意味もあります。

30年前のボロ自動車に対して「もう骨董だよ」と言う人もいます。

骨董は趣味です。骨董は、眺めたり触ったりしながら楽しむものであり、壊れるまで使い倒すものではありません。

ただ、昔は毎日使っていた道具が、時間が経って骨董になることもあります。

骨董の値段にも決まりがあるわけではありませんが、数万円から数千万円くらいと、その価値はさまざまです。

したがって単なる道具より安い骨董もありますし、美術品より高額な骨董もあります。

■骨董になりうる品物

「この品物でなければ骨董にならない」という品物はありません。ただし、骨董になりやすい品物があります。

骨董になりやすいのは陶磁器、書、絵、刀剣、武具、茶道具、仏具です。

陶磁器の器(き)とは入れ物のことで、食器、花瓶、調理器具などは骨董になりうる器(うつわ)です。

書(しょ)とは、毛筆で上質な紙に書かれた文字のことです。書道家という文字書きの達人が書いた書は骨董になりえます。

書画(しょが)は、書と絵が一緒に描かれた作品です。風景画を描き、その余白に詩を書いたものは書画といえます。

書が書かれていない絵だけの作品も骨董になりえます。浮世絵は人気が高い絵の骨董です。

刀剣(とうけん)は、主に切るときに使う刀(かたな)と、主に突くのに使う剣(つるぎ)を合わせたもので侍が使用した武器です。

刀剣は金属製で光沢があり、尖った形は美しいものです。それで武器である刀剣が美術品や骨董になるわけです。

刀剣は骨董として家に飾るだけでも法律に違反する可能性があります。日本刀を所有するには許可が必要です。

武具は戦いの道具で、全身に着ける鎧(よろい)や頭に被る兜(かぶと)などがあります。鎧と兜を合わせて甲冑(かっちゅう)といいます。

茶道具は茶道で使います。茶道はお客さんにお茶を出して歓迎していることを伝える行為で、フォーマル(Formal)なときは茶道具を使います。

普段使う茶道具は現代のものでも安価な製品でもよいのですが、骨董と呼べるくらい価値が高い茶道具は宝物のように扱います。

仏具は仏教の儀式で使う道具です。僧侶が仏具を使いますが、一般家庭にも仏壇という仏具があります。

仏壇は自宅に置く、先祖を供養するための簡易的な台です。墓とは別に仏壇を置くことでいつも先祖に手を合わせることができます。

自転車、鍋、農機具なども古くて価値があれば骨董と呼べなくもないのですが、普通はこれらは古道具(ふるどうぐ)と呼びます。

ここまでの説明は骨董の世界の入口にすぎません。骨董を知るにはさらに深く入っていく必要があります。

■陶磁器の深い世界

陶磁器自体には高い価値はなく、これでご飯を食べたり、料理を並べたり、お茶を飲んだり、花を入れたりするだけです。普通の道具です。

ところが陶磁器の作者が「どうせつくるなら美しいものをつくりたい」と思ってデザイン(design)を工夫したところ高い価値を持つようになりました。

人気の作者がつくった陶磁器は高額で売買され、価値が高すぎて使いにくくなり、大切に保管されるようになって骨董になりました。

陶磁器の壊れやすさも価値を高めます。小さな衝撃でも割れてしまうので保管が難しく、古いだけで価値が生まれた陶磁器もあります。

次のブランドの陶磁器は価値が上がりやすいことで知られています。美濃焼、瀬戸焼、有田焼、楽焼、信楽焼、備前焼、京焼、古伊万里、九谷焼など。

骨董になりやすい陶磁器の種類は皿、飯椀、蓋物、鉢、湯呑、急須、酒器、徳利、盃などです。

次の作者(陶芸作家という)の陶磁器は高値で取引されます。富本憲吉、加藤土師萌、藤本能道、十三代今泉今右衛門、石黒宗磨など。

骨董になるレベルの陶磁器は高値で取引されるので偽物が多く出回っています。そのためプロ(Professional)が本物かどうか調べる鑑定が行われます。

■書画の深い世界

骨董レベルの書画は掛け軸になっていることが多いです。作品を、台となる紙に貼り付けて、丸めて持ち運べるようにしています。

掛け軸は自宅の居間の床の間に掛けます。床の間は掛け軸や花瓶などの装飾品を置く狭い空間で、季節ごとに装飾品を変えて楽しめます。

書画の絵に使われる人気のモチーフ(motif)は仏教関連、山や川、花、鳥、獣、人物、美人、妖怪、風俗、役者、歌舞伎、歴史などです。

美人とは美しい女性のことです。女性だけにフォーカス(focus)するのは現代的ではありませんが、書画には美人画というジャンル(genre)があります。

アジア古来の黒インクである墨(すみ)だけで描かれた書画も骨董として人気です。モノトーン(monotone)が独特の雰囲気を持っています。

次の作者の書画は高値で取引されます。小室翠雲、松林桂月、上村松園、矢野一甫、伊藤博文、夏目漱石など。

書画も陶磁器と同じくらい偽物が多く出回っている骨董です。高額な書画を買うときはプロに鑑定してもらったほうがよいでしょう。

■刀剣、武具の深い世界

刀剣や武具は元々は戦闘用具でしたが、製作者が機能を追求した結果、機能美が生まれ美術品のようにみても楽しめる作品になりました。

戦(いくさ)が少なくなると、最初から美術品にする目的で刀剣・武具がつくられるようになりました。

昔の戦争のことを戦と呼ぶことがあります。

骨董になる刀剣は、日本刀、槍(やり)、脇差、短刀、鐔(つば)などです。彫金や銀細工といった飾りをつけた刀剣もあります。

骨董になる武具には兜、面頬(めんぼう)、籠手(こて)、胴、草摺(くさずり)、臙当(すねあて)、軍配、旗、勲章などがあります。

高額な刀剣・武具には「本物」が含まれている可能性があります。つまり昔の人が本当にそれを使って戦をしていたのかもしれない。

「本物」の刀剣・武具には霊がついている、と考える人もいます。もちろん霊は非科学的な存在なので信じない人もいます。

しかし「霊がついているかもしれない」と言われる刀剣・武具を買ったあとに不幸が起きたら、嫌な気持ちになりませんか。

本物の戦で使われていた「本物」の刀剣・武具を買うときは注意したほうがよいと思います。もちろん「本物」を持ちたい人もいますが。

■茶道具の深い世界

茶で客をもてなす儀式を茶の席や茶会、茶の湯といいます。茶の席の参加者は茶道というルール(Rule)にしたがって動きます。

茶の席や茶道を広めた人に千利休(せんのりきゅう)がいます。
1500年代の人で織田信長と豊臣秀吉に仕え、最期は切腹しました。

千利休の時代から茶道具は高額商品でした。現代のブランド品のようなもので、高額な茶道具を持っているほどステータス(status)が上がります。

茶道具は新品のころから高級な趣味の道具だったので、古くなって骨董になるのは自然な流れといえそうです。

茶道具を一気に紹介します。茶碗はお茶を入れる器で、茶道具のメイン商品です。両手で持つくらい大柄なのが特徴です。

棗(なつめ)は茶を入れる容器です。茶の席や茶道で使われる茶は抹茶で粉状になっているので持ち運ぶときに棗が必要になります。

抹茶は乾燥させた葉を粉にしたもので、湯に溶かして飲みます。葉を湯に浸けただけの緑茶や紅茶とは製法が異なります。

茶杓(ちゃしゃく)は、棗から抹茶をすくって茶碗に入れる道具で、小さなスプーン(spoon)です。水差しはお茶用の水を入れる容器です。

茶釜は水差しのなかの水を使って湯にする鍋です。柄杓(ひしゃく)は、水差しや茶釜のなかの水や湯をすくう道具です。

袱紗(ふくさ)は布で、茶道具の汚れを取ったり、高温になった茶釜の蓋(ふた)を取るときに使ったりします。要するにナプキンです。

茶筌(ちゃせん)は、茶を混ぜるための竹製の道具です。抹茶は粉なので湯を入れてから茶筌で混ぜる必要があるわけです。

扇子(せんす)は折り畳み式の団扇(うちわ)ですが、儀式の道具として使うので、茶の席の室温がどれだけ上昇しても扇子であおぎません。

■仏具の深い世界

仏具は仏壇を飾る品物です。仏壇は自宅の部屋に置くミニチュア(miniature)の寺のような存在で、仏像や先祖の写真などを置きます。

お金持ちは豪華で高品質の仏壇を持つとしますので、仏具のクオリティ(quality)も上がり、骨董としての価値を持つようになりました。

骨董になる仏具を紹介します。仏像には木製、銅製、珊瑚製、象牙製、磁器製、漆製などがあります。仏像とは仏の姿を表現した像のこと。

花立(はなたて)は花を入れる容器です。香炉は線香を立てる器です。火立(ひたて)はローソクを立てる道具です。

おりんは、お経を唱えるときに「チーン」と音を出すための道具です。純金のおりんは骨董どころか高額資産になります。

湯呑は仏壇用の小さなコップで、仏飯器は仏壇用の小さなお椀です。高坏(たかつき)は菓子や果物を置く皿です。

常花は花の形をした金属製の飾り物で、仏壇に置くことで華やかになります。瓔珞(ようらく)も飾り物です。

吊灯笼(つりどうろう)はライト(lightning)で、仏壇を明るくするために使います。

仏壇は小型のクローゼット(closet)のような木の箱と仏具で構成されますが、木の箱だけでも仏壇といえます。

位牌は木版と木の台でつくられた、亡くなった人の魂が宿るものです。位牌には霊が宿っているので骨董にすることはできません。

■日本人は骨董をどのように楽しんでいるか

若い日本人は骨董を昔の人の趣味とか、古臭い習慣といったようにネガティブにとらえているかもしれません。

ただ中高年の人たちが実用性のない骨董を集めるのは、若い人が実用性のない雑貨品やフィギュア(figure)を集めるのと変わりありません。

骨董ファンには、一種類だけを徹底的に集める人と、古くて価値のあるものならなんでも集めようとする人がいます。

例えば陶磁器ばかりを100個以上持っている人もいれば、陶磁器も茶道具も刀剣も集める人もいます。

骨董の楽しみ方の一つにプロによる鑑定があります。100万円で買った骨董が、1,000万円と鑑定されると嬉しいものです。

その逆に1,000万円で買った骨董を鑑定してもらったところ偽物であることがわかってしまうこともあります。

骨董愛好者は仲間と自分の骨董を見せ合うことがあります。作品の素晴らしさや入手経路などを語り合うのは楽しいひとときになります。

骨董ファンを長く続けていると目利きができるようになります。目利きとは本物と偽物を見極める力であり、価値を見抜く力のことです。

骨董ファンは次第に価値が高いものを求めるようになり、それは高額なので大金を使うようになります。この状態を日本語で「はまる」といいます。

骨董ファンは骨董をどこで買うのか。多くは骨董屋で買います。骨董屋の店主はプロなので品ぞろえがよく、偽物のリスクが小さいからです。

骨董ファン同士で物々交換をしたり、売買したりすることもあります。

骨董愛好者は、骨董市で骨董を買うこともあります。骨董市では素性がよくわからない骨董も販売されるので、目利き力が試されます。

骨董市は神社の広場などで開かれ古道具も出品されることから、骨董ファンでなくても楽しめます。フリーマーケット(Flea Market)です。

昔は借金の担保に骨董を差し出すこともありました。100万円を借りるときに、100万円の価値がある骨董を差し出すわけです。

■外国人は骨董をどのように楽しんでいるのか

外国人のなかには、骨董をアンティークとは区別して、日本文化に触れる目的で楽しんでいる人がいます。

それは骨董には日本の歴史と美意識が反映されているからです。日本好きな外国人は骨董に「はまる」かもしれません。

外国人が自宅を日本のようにしたかったら、骨董を飾ってはいかがでしょうか。本物の骨董は高額ですがレプリカ(replica)でも十分楽しめます。

日本に旅行に来た外国人には骨董市がおすすめです。

東京の大江戸骨董市は毎月開かれています。屋外の会場に露店が250点も並びます。

大江戸骨董市では骨董だけでなく古着や古道具、美術品、西洋アンティークも並びます。眺めているだけでも楽しいですよ。

西日本最大の骨董市は、京都で毎月開かれている弘法市と天神市です。1,200店が並び数十万人が訪れます。

弘法市は東寺で開かれ、天神市は北野天満宮で開催されます。ここでも骨董だけでなく人形、和服、盆栽などが並びます。

「日本の骨董」は、いかがでしたか？

今後の動画制作に活かしますので、コメント欄から感想いただくと大変嬉しいです。

それでは、また別の動画でお会いしましょう。



Japanese-listening-SUSHI

